リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所

第二十代会頭　山本　武美

リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所創立50周年まことにおめでとうございます。

小職は1997年9月から翌年6月迄の1年に満たない短い期間でしたが会頭をさせていただきました。時の副会頭は野田氏（三菱化成㈱）、儘田氏（三井物産㈱）、海老原氏（新日鉄㈱）、垣見氏（丸紅㈱）の各氏で、加えて専務理事今宮氏（三菱商事㈱）と云う陣容でした。しかしながら我々の期間は、日伯友好100周年（1995年11月15日）や日本移民90周年（1998年6月18日）と云う大イベントの間にあり記録に残る様な活動は残念ながら残す事は出来ずに過ぎました。

そう云う分けですので以下には小職の2度に亘るブラジル駐在（1983～1987年ヴィトリア、1996～1998年リオ・デ・ジャネイロ）経験をもとにその当時の印象的な経済状況について少し述べさせていただきます。

私がリオ・デ・ジャネイロに駐在していました当時は、フェルナンド・カルドーゾ大統領のレアルプランが始まった頃でした。単位通貨1レアルが1米国ドルに固定され、インフレはほぼゼロに抑えられていてブラジルは大変旺盛な内需に支えられ経済は活況を呈していました。特にテレビ、冷蔵庫、洗濯機の家電が爆発的に売れ、確かテレビの生産高は世界一だったはずです。

この様に家電が売れるのは、インフレがなくなった事により、低所得者層の人達がそれ迄インフレの為出来なかったローン購入や貯金が可能になり、自分の1回でもらう手当額より高価な品物が買える様になったためと知り、成程と感じ入った次第です。

それより10数年前に駐在していた頃のインフレ年率1000%とは全く違う庶民のビヘビァーでした。自動車生産も又100～150万台／年から200万台／年ももうすぐと云う事で私の関係してました鉄鋼業もフル生産で、将来の高級自動車用鋼板を視野に入れた投資も考えられていました。

経済が良くなると云う事は、国民がこんなに自信を持ち国全体を明るく活気づかせるのかと云う事を身を持って体験出来たのは大変貴重だったと思います。

さて、これからのブラジルはどうなるのでしょうか。

世界を見廻しますとブラジルをはじめ、中国、インドなど大国の経済発展が見込まれています。

この様な時、世界にとって最大の課題は、環境保全とエネルギー、資源の確保です。周知のようにブラジルはこれらの点では相当有利なポジションを占めています。鉄鉱石等の豊富な資源に加え、事実上CO_2負荷のないアルコール燃料の大きな産出能力を考えただけでも大きな期待が持てます。この様な事を考えますとこれからの日伯経済関係は従来とは比べものにならないくらい大きな意味を持つ様になります。先人が積み重ねて来た実績の上にますます日本とブラジルの関係強化につとめて行くべきであると思います。

その為にもリオデジャイロ日本商工会議所のますますの御発展を祈念する次第です。

以上雑感で大変恐縮ですが、挨拶にかえさせていただきます。